

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 43 回

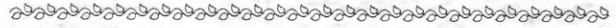
# 定期演奏会

平成 14 年 4 月 15 日 (月) 午後 7:00 開演

カザルスホール



# プログラム



## 第一部

指揮：山本雅三

春の訪れ	高橋保夫
春のノスタルジア	武井守成
春の海	宮城道雄(中川信良編曲)
マントリン・オーケストラのためのスプリング・スプリング	藤掛廣幸
I 五月の風に乗って	
II 春は過ぎ……	
III あの空へ、	
IV 季節は巡る	

## 第二部

小合奏

無線電信第一連隊	G. マネンテ(中野二郎編曲)
ピッチカートポルカ	ヨハン&ヨーゼフシュトラウス(嶋直樹編曲)
ドンジョヴァンニセレナーデ	W.A. モーツアルト(C. ムニエル編曲)

## 第三部

指揮：石黒不二夫

序曲サン・ジュスト (Overture San. Giusto)	I. ピテッリ
晩年に (Au Crepuscule de La Vie)	G. ラヴィトラーノ
ギリシャ狂詩曲 (Rapsodia Ellenica)	N. ラウダス

# 曲 目 解 説

## 第一部

### 春の訪れ

高橋保夫

作曲者(1930年～ )は日本マンドリン連盟の理事長を長年つとめられ、現在、顧問として、マンドリン音楽の普及・発展に大きな業績をあげております。滝山マンドリンアンサンブルを主宰し指揮をされております他、各所のマンドリンクラブで活躍されております。以下は作者自身の解説です。

30年前、正式に勉強もしないで気儘に「作曲や編曲ごっこ」を遊んだ時期がありました。

明日は休日、今夜は一杯やるか、何をしようかと楽しかるべき思いを胸一杯に脹らませている時に、ふと浮かんだメロディーを帰宅早々に書き留め、そして年末(昭和46年)の2日間きの連休に一気に四重奏に纏めあげたものです。

「春の訪れ」(昭和46年)は「花が咲き、蝶々が舞う陽春、身も心も軽く弾むような曲想」なのと、マンドリン仲間のお正月の新年会で発表したこと、私の処女作品であることから、この曲に「春の訪れ」と曲名を付けました。後日、平山英二郎先生のお目に留まり砧会の発表会(昭和48年)に初めてご採用いただき天にも昇る心地を味わった覚えがあります。

一介のアマチュアにとってはOSTの皆様、そしてご来場のお客さまに少しでも喜んで頂ければと心より願っております。

### 春のノスタルジア

武井守成

作曲者の武井守成氏は宮内省楽部長、後に式部長官の要職にありながら全生涯を作曲に専念され、日本のマンドリン・ギター音楽発展の推進者として大きな足跡を残されました。

大正4年「シンフォニア・マンドリン・オーケストラ」を創設、大正12年に「オーケストラ・シンフォニカ・タケイ(略称OST)」と改称し、戦時中は武井楽団の名で昭和18年第48回定演を最後に終戦を迎え、昭和24年11月の復興第1回の演奏会のすぐ後の12月急逝されました。ちなみに現OSTは昭和34年に杉田村雄氏が楽団を復興主宰、昭和61年の杉田氏の逝去後、昭和62年に武井御遺族のお申し出により名称を変更し、現在の「オーケストラ・シンフォニカ・東京」となりました。「春のノスタルジア」は作品番号22、日本の作曲家の先駆者で旧OSTとも関係の深い菅原明朗氏に贈られた曲で、昭和2年4月湯河原にて作曲、同年6月に作曲者自身の指揮で初演されました。(山本)

### 春の海

宮城道雄(中川信良編曲)

箏と尺八の二重奏曲として昭和4年に作曲された新邦楽の名曲です。A-B-Aの3部形式で、Aは春の海の波や、カモメの声などを描写した緩徐な部分。Bは陽気な舟歌と春霞ののどかさを巧みにおりませた急テンポな部分となっています。作曲者の宮城道雄は明治27年神戸生まれ。8才の時に失明、中島検校に入門し箏曲家の道に進み、明治38年に早くも免許皆伝。家庭の事情により朝鮮に渡り、14才で処女作「水の変態」を作曲。大正6年に東京進出。輸入された西洋音楽に刺激され、新日本音楽運動をおこし、邦楽器による大規模な合奏曲や洋楽器との合奏曲などを試み、また、邦楽器を大幅に改造、新たな楽器の製作にも意欲をもやしました。昭和7年、フランスの女流バイオリニスト、ルネ・シュメーの演奏会で「春の海」を合奏。その後、日・米・仏でレコードが発売され世界的な名声を得ました。昭和31年6月、演奏旅行の途中に列車から転落し、62才の生涯を閉じました。(山本)

### スプリング・スプラング

藤掛廣幸

作曲者 藤掛廣幸は1949年岐阜県に生まれ、愛知県立芸術大学作曲課程を卒業、同大学院修士課程修了。作曲家としてオーケストラ曲、オペラ、ミュージカル、合唱曲、吹奏楽曲、マンドリン曲など幅広いジャンルに互る作品を発表し、シンセサイザー奏者としては数多くのコンサートを開催、また編曲者・指揮者など幅広い活動を精力的にこなしておられます。JASRAC「日本音楽著作権協会」正会員、日本作曲家協議会会員を勤められています。

曲名の「スプリング」は春、「スプラング」は飛び跳ねる、芽が出る、生じる等の過去形とのことです。

水上勉原作の「ブンナよ、木からおりてこい」という少年少女のために書かれた物語を元に1999年、ミュージカルが作曲されました。その中から4曲を選び最初はマンドリンとギターの二重奏曲として発表されています。その後四重奏の形を経て、今回演奏するマンドリン合奏のために書き直されました。4つの楽章はそれぞれ、「五月の風に乗って」「春は過ぎ……」「あの空へ」「季節は巡る」の副題がついています。

ブンナはトノサマガエルです。水上勉は原作のあとがきの中で「生きとし生けるもの、すべて太陽の下にあって、平等に生きている。蛙も鳶も同じである。だが、この世は、平等に生きているといっても、弱肉強食である。賢い者は愚かな者を蹴落とし、恥ずかしくて生きている。動物の世界だけではない。人間の世界がそれである。ブンナは、こんな世の中で、もっとも弱いものの象徴である蛙である。ブンナという名は、釈迦の弟子の一人の名にちなんでつけられているが、賢明な弟子のその苦悩を、ブンナは蛙の身でなめるといふ物語である」と書いています。

緑の萌え出る春。新しい命が生まれる春。全ての命が生まれる生命力にあふれた春の素晴らしさを力強く歌い上げ、二度とない今という時を力一杯生きようというエンディングに終わる、生きることの素晴らしさを表現した曲です。今後、多くのマンドリンクラブがこの曲を演奏会で取り上げられていくことを願ってやみません。(嶋)

## 第二部

### 行進曲「無線電信第一連隊」

ジュゼッペ・マネテ(中野二郎編曲)

ジュゼッペ・マネテ(1868年～1941年)はイタリアのモルコーネに生まれ、ローマで亡くなりました。聖ピエロ王立音楽学校でトランペット、和声学、作曲法を学び、マドリッド音楽学校、さらにローマの聖チュチリア高等音楽学校を卒業しました。歩兵連隊の軍楽隊長として活躍する傍ら数多くの吹奏楽曲、行進曲そしてマンドリンのための曲を残しました。行進曲の多くは彼が楽長として所属した連隊名もしくは地名をつけたものが多くこの曲は「無線電信第一連隊」に贈られたものと言われています。ただし1933年にマンドリン曲として発表されたこの曲は吹奏楽のために書かれたものは出版されていないようです。マンドリン曲としては「華燭の祭典」「マンドリン芸術」「メリアの平原に立ちて」など優れた作品を数多く残しています。(嶋)

### ピチカートポルカ

ヨハン・シュトラウス(嶋直樹編曲)

シュトラウス一家(ヨハン・シュトラウスⅠ世とその息子達であるヨハンⅡ世、ヨゼフ、エドゥアルト)は、19世紀初頭より約100年間にわたりウィーンを中心としてヨーロッパ全土に一大旋風を巻き起こしたウィンナ・ワルツブームの中心的な存在でした。

本日演奏する「ピチカートポルカ」は1869年にヨハンⅡ世(1825～1899)と2つ違いの弟ヨゼフ(1827～1870)の合作による曲です。当時2人は演奏旅行先のロシアのハバロフスクで共に過ごしていました。全曲を通して弦のピチカート(弦を指で撥く奏法)だけで演奏されるこの曲も当初ヨハンⅡ世が作曲した時には弦楽5部の他にホルンが入るといふ編成でした。しかし弟ヨゼフの助言によりホルンを除いたといふいきさつがあり2人の合作ということになったようです。原曲には中間部に4小節だけトライアングルが入っています。ヨハンⅡ世にはもう1曲晩年に書かれたと言われる「ニューピチカートポルカ」があり、こちらも可愛らしい作品として知られています。

ポルカは、1830年頃チェコのボヘミア地方に生まれ、以後急速に全ヨーロッパに広まった速い拍子の舞曲です。これを最初に芸術音楽に取り上げたのは「チェコ近代音楽の父」と呼ばれるスメタナ(1824～1884)で、弦楽四重奏曲「わが生涯より」の第2楽章や交響詩「わが祖国より」の第4楽章《ボヘミアの森と草原より》の中にもその例が見られます。「半歩」を意味する「ブルカ」が語源とも言われ上拍(アフタクト)で始まる場合が多いという特徴を持っています。ピチカート奏法はリュートやギターなど弦を撥く楽器が管弦楽から姿を消した後はその効果を表すために用いられたものですが、その点では私達のような撥弦楽器の合奏向きの曲であるとも言えるのかも知れません。(嶋)

### ドンジョバンニ セレナーデ

W.A.モーツァルト(C.ムエル編曲)

スペインの伝説上の人物であり典型的好色貴族の「ドン・ファン」、そのイタリア語読みが「ドン・ジョバンニ」です。「ドン・ファン」を題材にして今日までにいかに多くの文学作品が書かれ、また作曲がなされたことでしょうか。

W.A.モーツァルト(1756年～1791年)は、ダ・ポンテ作の台本を元に2幕10場の歌劇「ドン・ジョバンニ」(K.527)を作曲しました。初演は1787年、31歳のモーツァルト自身の指揮でおこなわれ好評を博しています。今回演奏する曲は、その第2幕でドン・ジョバンニがかつての恋人の召使を口説こうと、

マンドリンを手に窓に向かって歌い上げる有名なセレナーデを、C.ムニエルがマンドリン合奏のために編曲したものです。青木爽氏の訳による歌詞をご紹介します。

窓辺に出でて 我が歌を聴きたまえよ 我が声を 君を恋する我が悩みを  
君よ出で来よ この夕べ 花びらのごとき そのくちびる 星のごと輝く そのまなこ  
やつれ果てし我が思いに 君よ出で来よ この夕べ (嶋)

### 第三部

#### 序曲 サン・ジュスト

イニャーノ・ビテッリ

作曲家(?-1956年)はイタリア(晩年ボローニャに居住)の作曲家であり、弦楽四重奏団をつくって演奏するほか、ビテッリオオーケストラを主催して指揮をするなど幅広く活動しました。非常に多数(マンドリン曲だけでも百数十曲)の作品を作りました。「中世のお城にて」など作曲コンクールで入選した曲がありますが、ワルツ、パソドブレなどに洗練されたものがあります。この曲は1922年11月にイル・マンドリーニ誌に発表されたものです。

イタリア北東部のトリエステの街にサン・ジュストという寺院があり、これを題名にしたと云われていますが、イル・マンドリーニ誌によると騎馬戦の模様を巧みに表現したものと紹介されています。サン・ジュストが僧籍に入る前に武功をあげた戦を描写したものと思われる。

叙事的な序曲で、マエストロの荘重な序奏について、3/4のアンダンテの旋律に移り宗教的な雰囲気をかもし出していきます。一転して、フォルテシモのアレグロで騎馬戦への展開をつぎつぎと表わしております。途中ややテンポがゆるくなりますが、この部分でカンパナの音が特異的に使われているのが印象的です。この曲はトリエステ修道院長M.ルビーノ氏に贈られております。(石黒)

#### 晩年に

ジャチント・ラビトラーノ

作曲家(?-1938年)はイタリアのイスキア島フォルノに生まれ、ナポリの音楽学校で学びました。アルジェリアのボーナ市に移り住み、当地で永眠しております。そのためフランスとの交流が多く、フランス名をイヤシンセ・ラビトラーノと称しています。

彼の作品は1900年初頭の頃(青年時代)の「ローラ」、「レナータ」、「雪」などの意欲的な、情熱的な曲と、世界する5年前の1933年に出版・発表された「晩年に」、「道化師」、「全ては去りぬ」等の物静かな、味わいの深い、暗示的な曲とに分けられます。

この曲も題名のとおり、人生の晩年の心境を表現しています。これまでの人生を静かに振り返り、激しく情感をよみがえらせ、深くうなずき、そしてやりとげた想いをこめた曲です。この曲の演奏を今は亡き高田三九三氏、今津章氏、西原正氏に謹んで捧げます。(石黒)

#### ギリシャ狂詩曲

ニコラオス・ラウダス

作曲家(1879年-1940年)はギリシャのアンドロス島に生まれ、一家でアテネに移住し、その地で永眠しました。アテネ大学で科学をアテネ芸術大学で音楽を学び科学者であるとともに優秀な音楽家でありました。1900年マンドリンオーケストラ「アテナイキ・マンドリナータ」を設立、1910年にイタリアのクレモナ国際コンクールに参加し第三部門で優勝しました。ギリシャ・イタリア戦争勃発(1940年)まで、演奏活動をつづけました。晩年は音楽教育に力を注ぎ、またギリシャ音楽家協会の創立に尽力しました。

彼の作品は「エカーフの嘆き」「クレタ風舞曲」などギリシャ神話、風土に基づくものが多く、この1915年発表の「ギリシャ狂詩曲」もギリシャ風主旋律と舞曲から構成されています。オーケストラ・シンフォニカ・タケイの創始者武井守成氏は1925年7月号のマンドリン・ギター研究誌で「ギリシャ狂詩曲」と「交響楽詩」の印象について、「私は彼の曲から一種名状しがたい力のひらめきを認めた。それはマンドリン音楽において、かつて見ることの出来なかったものである(以下省略)」と述べています。

曲はアンダンテ・モッソーの荘重雄大な序奏でギリシャ風旋律が奏された後、アンダンテに入り、低音楽器の和音のもとにマンドリンのソロが神秘的に演奏されます。その後、アレグロ・ノントロッポでトライアングルとタンバリンを加えて、舞曲風のリズムと速い旋律が情熱的に展開・反復されます。そして、最初の主旋律に戻り、グランドオーソに移り、ポリフォニーのうちに荘重に終結します。この曲は副題に「ギリシャ風主題による前奏曲」としており、第二ギリシャ狂詩曲とも称されますが、このプログラムでは1927年ミラノ アレッサンドロ・ヴィッサリ発行のスコアの題名を使用しました。(石黒)

指揮者：○石黒不二夫 ○山本雅三

コンサートマスター：○本間輝樹 嶋直樹

第一マンドリン：○本間輝樹 田島明子 諸井美津江 前田啓子  
嶋直樹 新居裕久 城戸かほる

第二マンドリン：○後藤俊明 坂井美佐子 富田容子 佐和直子  
○藤田正美 山崎悦子 中村順子

マンドラ テノール：○岩片順子 田中倭文子 滝田ふさ子 深野靖夫  
渡辺清 玉木理恵子 佐々木興治 新谷文子

ギター：宮本紀子 平田陽一 戸次脩 ○山本雅三  
高橋貴久子 城所俊雄 門田雄二 佐竹眞弓  
沢田行雄

リュートモデルノ：○宮本皓永

マンドチェロ：宮崎泰行 田村美恵子 高梨一弘

マンドローネ：○家城孝治 宮沢栄作

コントラバス：佐藤正 ・岩合舞

フルート：・比護いづみ

クラリネット：・品川秀世

打楽器：・秋葉久美子 ・山田俊之

〔 ○ ————— 幹事  
・ ————— 賛助出演 〕

当OSTの代表幹事として長年にわたり、会の運営と発展にご尽力いただきました今津章氏が平成13年7月に、また、ギターを弾いておられました元メンバーの西原正氏が平成14年2月に永眠されました。ここに、OSTへの貢献を深く感謝いたしますとともに衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

オーケストラ シンフォニカ 東京 (OST)

連絡先：〒236-0057 横浜市金沢区能見台3-28-6 石黒不二夫

TEL 045-770-4806